

自分の考えをよりよく伝えられる授業を目指して

—言語活動の指導の工夫（練り合い）を通して—

亘理町立亘理中学校 佐藤 裕一

1 授業づくりに関わる課題

中学校学習指導要領（平成29年告示）で「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと」が示され、国語科においても、言語能力の育成を図るために、改訂の趣旨を踏まえた言語活動の充実が求められている。

しかし、私のこれまでの言語活動の取組では、生徒が自分の考えを一方向的に伝えるだけ、他者の考えを聞くだけの話し合い活動となってしまうこともあり、単元の目標を達成するための活動となっているか、課題を感じていた。

生徒には、他者の考えを安易に受け入れるのではなく、自分の考えを確かめ共有し、他者の考えと比較・検討した上で自分の考えを広げたり深めたりしてほしい。そのために、生徒同士による質問や助言などを通して、発表者の伝えたいことを確認・共有し、さらに比較・検討する学習活動を「練り合い」として言語活動に取り入れ、生徒が自分の考えをよりよく伝えられる授業を目指すこととした。

「よりよく伝えられる」とは、互いの立場や考えを尊重した上で、正確に理解し適切に表現することを指し、「練り合い」を効果的なものにするすることで、私の授業づくりにおける課題を解決できると考え、本研究に取り組むこととした。

2 研究の内容と方法

本研究の内容は、生徒が言語活動を主体的に行えるよう指導していくことで、中学校学習指導要領（平成29年告示）の目標(2)の達成を目指すものである。

その手立てとして、「練り合い」を通して他者の考えを踏まえ、自分の考えをよりよく伝えるための表現の工夫を考えさせる。

(1) 研究の内容

① 手立て

ア 「練り合い」のモデルの提示

生徒に「練り合い」の活動を理解させ、単元全体の見通しを持たせることを意図して、「練り合い」のモデルを提示する。

生徒同士で「練り合い」を行う前に、教師と生徒による「練り合い」を行い、Ⅰ期では食文化をテーマとしたレポートの調査結果項目の構成をはじめとした表現の工夫、Ⅱ期では発表資料の内容や用い方

といった表現の工夫について、質問や助言によって発表者の伝えたいことを確認・共有し、他者の考えと比較・検討していく活動を体験させる。これにより、生徒たちに具体的なイメージを持たせ、生徒同士で「練り合い」ができる下地を作る。生徒が「自分の考えが分かりやすく伝わるように書いたり、話したりできるようになる」という目標を持って取り組むことで、「思考力、判断力、表現力等」の育成ができるようになる。と考える。

なお、生徒に行わせる言語活動を教師が実際に行うことは、設定した言語活動で育成を目指す資質・能力（指導事項）が適切に評価できるかを確認することにもなる。

イ 伝わり方の変化を確かめる機会の設定

レポート作成では、「練り合い」の中で出された提案を基に清書したものを再度読み合わせて、構成をはじめとした表現の工夫とその効果などについて、良くなった点や改善点を確かめる機会を設定する。

プレゼンテーションでは、「練り合い」を経て再検討した資料の内容や用い方で2回目の発表をし、伝わり方の変化を確かめる機会を設定する。

「練り合い」と同じグループで確かめる機会を設定することにより、伝わり方の変化を客観的に捉えることができると考える。

② Ⅰ期の授業実践

「書くこと」の単元「調べて考えたことを伝えよう」では、〔思考力・判断力・表現力等〕のB(1)Oに基づく目標を設定し、食文化をテーマにしたレポートを作成した。その共有の学習過程で、レポートの調査結果項目の構成をはじめとした表現の工夫について練り合い、自分の文章の良い点や改善点を見いだした。

本単元における言語活動は、第2学年の言語活動例のイに基づいて行う「調べて考えたことをレポートにして伝えよう」とした。

③ Ⅱ期の授業実践

「話すこと・聞くこと」の単元「説得力のある提案をしよう」では、〔思考力・判断力・表現力等〕のA(1)Uに基づく目標を設定し、亘理町の魅力を伝えるプレゼンテーションの資料作成と発表を行った。表現、共有の学習過程で、発表資料の内容や用い方について「練り合い」を行い、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫した。

本単元における言語活動は、第2学年の言語活動例のアとイに基づいて行う「亶理町の魅力を伝えるプレゼンテーションをしよう」とした。

(2) 検証方法

本研究の有効性を検証するために、2つの手立てによる授業実践を行った。Ⅰ期ではレポート作成の過程における構成等の変化について、Ⅱ期では発表資料の内容や用い方の変化について、それぞれ分析を行う。また、2つの実践授業後、生徒を対象にした授業に関する意識調査を実施し分析を行う。

3 研究の結果と考察

(1) 研究の結果

① Ⅰ期の授業実践

食文化をテーマにしたレポートを作成するに当たり、調査結果項目の構成をはじめとした表現の工夫について練り合い、自分の文章の良い点や改善点を生徒が見いだすことができた。具体的には、図1の①のように調査結果項目を時系列に沿って構成し直したり、自分のテーマに迫る結果が得られた項目を後に構成し直したりする生徒が多く見られた。

構成を練り合う際、私としては調査結果項目を並べ替えることを想定していたが、教師と生徒で練り合っているうちに、調査結果項目の文章を内容によって細分化し、図1の②のように配置し直す生徒も現れた。細分化し、再度構成を見直すことで、項目にふさわしい文章の内容になっていたの、構成に対する考え方の1つとして取り上げ、全体に紹介した。これにより、他の生徒も自身のレポートを見直し、再度構成する様子が見られた。

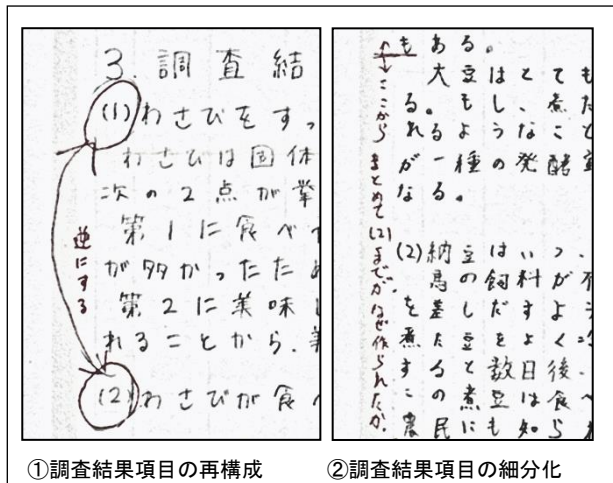
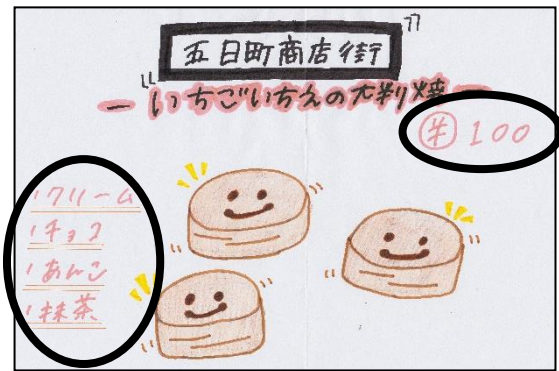


図1 生徒が書き込みをしたレポートの下書き

② Ⅱ期の授業実践

亶理町の魅力を伝えるプレゼンテーションの資料作成と資料を活用しての発表を行った。発表資料において取り上げる町の魅力は2つ、用いることができる発表資料は2点とした。そのうち、写真が入った資料は1点という条件である。発表資料の内容や用い方について練り合い、自分の考えがより分かり



やすく伝わるように、発表資料を作り直したり、用い方を考え直したりする表現の工夫ができた。

図2 助言を受けて情報を追記した発表資料

図2は、「練り合い」で「白いところが余っていてもったいない。イラストを大きくするか、何か情報を付け足したら」との助言を受けて、黒丸で囲んだ部分を追記したものである。付け足す情報についても、グループ内で比較・検討する様子が見られた。また、他者からの助言だけでなく、他者の作品を参考にしたり、考えを出し合ううちに自ら新たな着想を得たりして、発表資料を作り直す生徒が見られた。

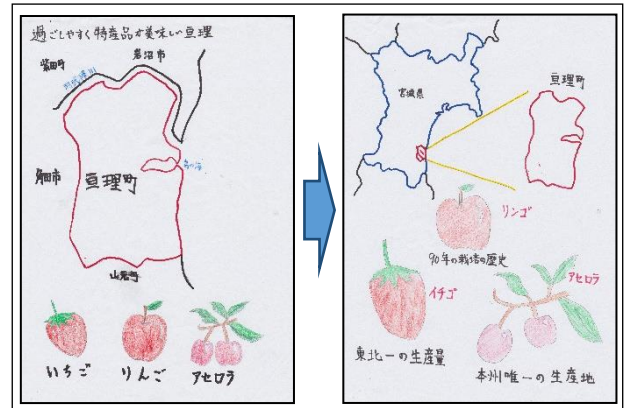


図3 聞き手の立場を意識して作り直した発表資料

図3は聞き手が福島県の人であるという意識を「練り合い」で強め、宮城県内における亶理町の位置を示すよう作り直した資料である。他にも、聞き手に伝わりづらいと考えられた部分に詳しい説明を加えたり、言葉を言い替えたりして、図4のように原稿を再検討する様子が見られた。「はらこめし」を写真が入った資料として採用する生徒も多い中、「はらこめし」に写真が入った資料を用いず、言葉だけで伝

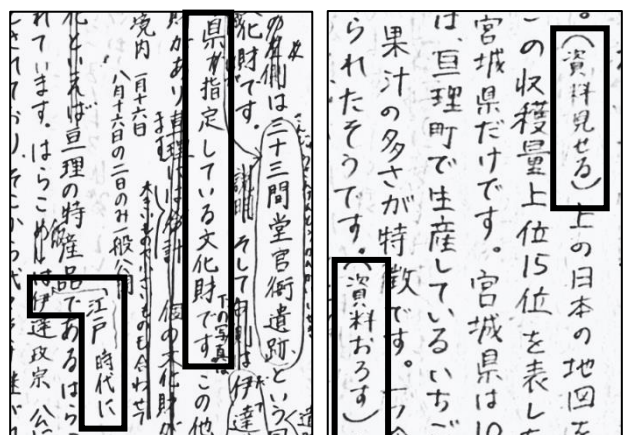


図4 練り合い後の

図5 練り合い後の

える生徒も見られた。聞き手に想像させる効果を狙ったもので、写真は他の魅力を伝える際に効果的に取り入れていた。写真の使用に関する発表の工夫と見取り、全体に紹介した。

分かりやすく伝える用い方の工夫として、発表資料を聞き手全体に見えるように左から右に動かしたり、発表資料のどの部分を説明しているのかを指差しながら話したり、図5のようにどのタイミングで資料を見せたら良いかを検討したグループもあった。

③ 授業に関する意識調査の結果

2つの実践授業を終えて実施した授業に関する意識調査では、それぞれ以下の結果が得られた。

アの手立てに関する「教師が生徒と一緒に『練り合い』をしたことで、その後の級友同士の活動がイメージできたと思いますか」という質問に対して、表1の結果となった。回答の1と2を合わせると96%の生徒が肯定的に回答していることから、「練り合い」を理解し具体的なイメージを持って活動できていたことが分かる。多くの生徒に単元全体の見通しを持たせられていた。

また、イの手立てに関する2つの質問では、表2で示すように、約8割の生徒が、「練り合い」を経て、「自分の作品が良くなった」「自分の考えの内容を分かってもらったり、理解してもらったりできるようになった」と回答している。自由記述からは、再検討したものを練り合ったグループで見合ったことで伝わり方の変化が確かめられ、内容や用い方など作品をよりよいものにできたと実感していたことや、確かめる機会の設定により自信を持って自分の考えを伝えられていたことが見取れた。多くの生徒に自分の考えがよりよく伝わったと実感させられていたことが分かった。

一方で、質問の(2)に対して「思わない・どちらかといえば思わない」と回答した生徒の理由を見ると、「皆が自分の作品を良いといって、改善点を指摘してもらえなかった」「最終的に自分が考えた案を使ったから」というものだった。

(2) 考察

① アの手立てについて

授業に関する意識調査の表1から、アの手立ては「練り合い」という活動を理解させるのに非常に有効だった。アの手立てが機能したのは、練り合う前に、発表者が表現の工夫の意図や伝えたいことを聞き手に説明する段階を設定したことで、「練り合い」の論点がそれることなく取り組むことができたからだと考える。

「練り合い」という活動を理解したことで、生徒同士による質問や助言などを通して、発表者の伝えたいことを確認・共有し、さらに比較・検討することができた。これまでの授業では、自分の考えを伝えるだけ、他者の考えを聞くだけだった生徒が、他者の考えと自分の考えを比較・検討できるようにな

表1 授業に関する意識調査の結果①

(1) 教師が生徒と一緒に「練り合い」をしたことで、その後の級友同士の活動がイメージできたと思いますか。

(n=120/単位：人)

回答 対象	1	2	3	4	5
2年生 (割合)	82 (68%)	33 (28%)	4 (3%)	1 (1%)	0 (0%)

※回答

1 思う 2 どちらかといえば思う 3 どちらともいえない
4 どちらかといえば思わない 5 思わない

表2 授業に関する意識調査の結果②

(2) グループで出た意見を基に考えたことで、自分の作品が良くなったと思いますか。

(n=120/単位：人)

回答 対象	1	2	3	4	5
2年生 (割合)	47 (39%)	57 (48%)	10 (8%)	5 (4%)	1 (1%)

(3) これらの授業をする前より、自分の意見の内容を分かってもらったり、理解してもらったりできるようになったと思いますか。

(n=120/単位：人)

回答 対象	1	2	3	4	5
2年生 (割合)	35 (29%)	59 (49%)	21 (18%)	3 (3%)	2 (2%)

※回答

1 思う 2 どちらかといえば思う 3 どちらともいえない
4 どちらかといえば思わない 5 思わない

った。発表者の伝えたいことを土台にして考えを出し合ったことで、自分では気付かなかった点や、考え付かなかった工夫に気づき、考えが広まることにつながった。また、他者からの質問を受けることで、考えを深める活動にもつながった。

授業に関する意識調査の自由記述欄に見られた以下の記述からも、生徒が以前より考えを広げたり深めたりしようとする姿が見てとれる。

- ・ 聞いて終わりではなく、「自分だったらどうするだろう」という考えを持つことができた。
- ・ 以前はただ意見を聞いていたが、今は「何でこうなるの」と考えるようになった。

教師と生徒が練り合った際には、相手の考えを尊重し、モデルの提示を通して質問や助言の仕方が批判的にならないように伝えた。意識調査の自由記述には、聞き手の態度について「うなずきながら聞いてくれた」「自分が思っていることに対して一緒に考えてくれた」と書かれていたものも多く、聞き手の共感的態度が発表者に安心感を与えたことによって考えを言いやすかったと感じているようであった。モデルの提示により具体的に活動内容を示せたことが有効に働いたと考える。

② イの手立てについて

授業に関する意識調査の表2から、イの手立ては生徒に自身の変化を客観的に捉えさせるのに有効だったと考える。自分が考えた表現の工夫について、他者から伝わり方の変化を伝えられることで、他者への伝わり方に基づいた振り返りができたことが大きな要因になったと考える。また、Ⅰ期・Ⅱ期ともに、練り合う前と後でレポートやプレゼンテーションを同じメンバーで見合うよう設定したことで、発

表者の表現の工夫やその効果などの変化を他者が感じ取りやすかったことも、イの手立てが機能した要因だと考える。

③ 目標に対して

I期では、アの手立てにより「練り合い」が効果的になり、多くの生徒が単元目標にある自分の文章の良い点や改善点を見いだすことができた。一方で、モデルとして示したレポートが詳細で文章量が多かったために、生徒が読む際に時間が掛かり、教師との「練り合い」にスムーズに入っていくことができない生徒もいた。生徒の実態を踏まえたモデルとしては不十分だった。

II期では、生徒の実態を踏まえたモデルの提示を意識したことで、単元全体の見通しがより明確になった。発表資料や用い方について、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫していくことができ、単元の目標を達成できたと考える。

2つの授業実践を通して、質問や助言によって発表者の伝えたいことを確認・共有し、他者の考えと比較・検討していく中で、自分の考えがよりはっきりと形成されることが分かった。また、「練り合い」として設定した時間を超えて活動に取り組む様子からは、伝えたい気持ちの高まりが感じられた。このことから、生徒の伝え合う力が高まったと考える。

伝え合う力が高まったことで、イの手立てがより有効に働き、聞き手への伝わり方や表現の工夫の効果を想像する力が養われ、表現を工夫することや自信を持って考えを伝えることにつながったと考える。

以上のことから、「社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」という教科の目標に対しても迫れたものと考えられる。

4 研究の成果と課題

(1) アの手立てにおける成果と課題

- 生徒に「練り合い」という活動を理解させるのに非常に有効だった。
- 生徒同士によるグループ活動で、活動内容を多くの生徒がイメージできているため、活発に発言し合う「練り合い」になり、表現の工夫につながられた。
- 「練り合い」のモデルを提示する上で、教師の作品を見せたため、作品完成までの過程を生徒に具体的にイメージさせることができた。
- 教師が実際にレポートやプレゼンテーションを作り、作成過程での難点を体験することで、どのような部分について練り合わせるか、どのような解決方法があるかを事前に検討することができた。事前に検討したことで、指導事項を適切に評価できるかの確認にもつながった。
- 生徒に練り合わせる論点をしっかりと設定する必要があった。

- 生徒の実態に合わせて、教師が用意する作品に使う言葉を平易なものにしたり、完成度を考慮したりする必要があった。

(2) イの手立てにおける成果と課題

- レポートの下書きと清書、プレゼンテーションの1回目と2回目をそれぞれ確かめる時間を設定し、伝わり方の変化をグループのメンバーから聞くことによって、自分が考えた表現の工夫について客観的評価を基に振り返ることができた。
- 聞き手に対する伝わり方を意識してレポートの作成やプレゼンテーションの発表資料を作成したり、用い方の工夫を考えたりしたことで、聞き手を意識した表現の工夫につながった。
- 自分の表現の工夫による伝わり方の変化だけでなく、他者の表現の工夫で有効だと感じたものを取り入れたら自分の考えがより聞き手に伝わったのではないかと、さらに考えを深める生徒が見られた。
- 生徒に対して、「練り合い」後は内容や用い方を必ず変えなくてはいけないという誤った認識を持たせてしまっていた。他者の考えを踏まえて再検討した結果として、内容や用い方が変わらなくてもよいことを十分伝えられていなかった。
- 単元の目標への意識付けが不十分だった。単元の指導事項よりも、小学校での指導事項である「声の大きさや強弱、間の取り方」に意識が向き、自己評価を低く付ける生徒が見られた。「表現の工夫による伝わり方の変化」について振り返らせたはずが、「流暢に話すこと」について振り返っていたことから、生徒に対する目標の示し方を改善する必要があった。

「自分の考えをよりよく伝えられる授業」を目指して、言語活動の指導の工夫としての「練り合い」を取り入れてきた。アの手立ての「練り合い」のモデルの提示、イの手立ての伝わり方の変化を確かめる機会の設定により、生徒が伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりする姿が認められた。

なお、課題として残った部分に対して検討を重ね、授業改善していきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 中等教育資料 2019年10月号. P15

【図表等の許諾について】

図1, 4, 5は授業実践の中で生徒が記入したワークシートの一部である。氏名を伏せて掲載することとし、生徒の保護者から使用許諾を得た。

図2, 3は授業実践の中で生徒が作成した資料である。氏名が分からないように掲載することとし、生徒の保護者から使用許諾を得た。